

TAMA CINEMA 通信



TAMA CINEMA FORUM

TAMA映画フォーラム実行委員会 〒206-0025 多摩市永山1-5 ベルブ永山(永山公民館内)
代表:042-337-6661 直通:080-5450-7204 <http://www.tamaeiga.org/>

特別上映会 7/21 日 ベルブホール (ベルブ永山 5F 京王永山駅・小田急永山駅下車徒歩約2分)

PATERSON パターソン



脚本・監督：ジム・ジャームッシュ

© Photo by MARY CYBULSKI ©2016 Inkjet Inc. All Rights Reserved.

上映スケジュール

- 10:30 — 12:28 第1回上映 ★(保育付き)
- 13:00 — 14:58 第2回上映 ★(保育付き)
- 15:30 — 17:28 第3回上映
- 17:35 — 18:35 ゲストトーク
- 19:00 — 20:58 第4回上映

- *全席自由・各回入替制。開場は15分前です。
- *上映時間は変更になる場合があります。
- *ゲストトークはチケット(半券含む)提示で入場できます。

チケット料金

- 前売：大人(中学生以上) 1,000円
- 当日：大人(中学生以上) 1,200円

こども(4歳~小学生)、TAMA映画フォーラム支援会員、障がい者とその付添者1名は、当日600円

第3回上映後に、翻訳家の柴田元幸氏と詩人のマーサ・ナカムラ氏によるトークを実施いたします。「ディテールやバリエーション、日々のやりとりに内在する詩」(監督のメッセージより)の魅力に迫ります。

柴田元幸氏(翻訳家)

1954年生まれ。著作に『ケンブリッジ・サーカス』など。最近の訳書に、マーク・トウェイン『ハックルベリー・フィンの冒けん』、編訳書にジャック・ロンドン『犬物語』など。6月18日にステイヴン・ミルハウザー『十三の物語』が刊行。

マーサ・ナカムラ氏(詩人)

1990年生まれ。埼玉県出身。2014年、早稲田大学文化構想学部文芸・ジャーナリズム論系卒業。2016年、第54回現代詩手帖賞受賞。2017年、思潮社より初詩集『狸の匣』刊行。2018年、第23回中原中也賞受賞。

●●●●● 上映に寄せて ●●●●●

前野健太氏が「豆腐のような毎日さ」と歌ったように、日々は慌ただしくあっという間に流れていく。朝、眠い目をこすりながら昨日と同じように熱いコーヒーを体に流しこみ、あの角を曲がって職場に向かっていく。

本作はニュージャージー州パターソンに住むバス運転手のパターソンが、妻ローラや愛犬マーヴィンと暮らす7日間の物語である。自分自身の手触りを大切にしながら、ギターやカップケーキで生活に彩りを与える妻とかたわらで話を聞きながらそっと支える夫。表立って発表することはせず、秘密のノートに詩を書きとめ、詩情に身を任せるパターソン。自身と同じ名前の街をバスで巡回するなか、繰り返されるように見える日々でも、ささやかな視点でとらえることの面白さや、少しずつ変わっていく味わいもある。

かけがえのない日常をみつめながら、詩が立ち上がっていくさまを体感してほしい。コインランドリーのラッパーや自作の詩を読む少女のように。(内田崇正)

実行委員のおススメ映画コーナー

ここでは実行委員のおススメ作品を紹介いたします。ネタバレもありですのでご注意ください。

『バトル・オブ・ザ・セクシーズ』

(ヴァレリー・ファリス、ジョナサン・デイトン共同監督 / 2017年 / アメリカ)

1973年、全世界9000万人の目をくぎづけにした決戦があった。女子テニス世界チャンピオンのビリー・ジーン・キングと、男子の元チャンピオン、ボビー・リッグスによる男女対抗試合だ。

当時女子プレイヤーの優勝賞金は男子のわずか1/8。ビリー・ジーンはこの格差に抗議し、仲間と共に女性テニス協会を立ち上げる。一方、表舞台から遠ざかっていたボビーはギャンブルに依存し、妻に愛想つかされていた。もう一度、世間の脚光を浴びたいと考えたボビーは「男性至上主義者」代表としてビリー・ジーンに挑戦状を叩きつけた。

この映画は単なる男女の戦いだと思ったら間違いである。性の多様性、そして1人1人の内面を見事に描き、本当に闘うべき相手が何かを示している。

『ラ・ラ・ランド』でアカデミー主演女優賞に輝いたエマ・ストーンが、今作では4ヶ月の特訓で7キロの筋肉をつけて肉体改造をして、ビリー・ジーンを見事に演じ切っている。

彼女のような人たちが懸命に世の中を変えてきたのだと知った。それから45年経ったが、今はどうだろうか？ (櫻木勇人)

『友罪』 (瀬々敬久監督 / 2018年)

瀬々敬久監督の視線はいつも冷静である。登場人物がいかに過酷な状況にあっても決して偏らず、あるがままの姿を淡々とフィルムに焼き付けていく。そのさまは、ゾッとするほど冷酷でありながら、カメラの奥の眼差しはどこまでも優しい。

その優しさを裏付けるように『友罪』には希望という名の煌めきの瞬間が物語の最後に出現する。

未成年で人を殺してしまった鈴木(瑛太)と、中学の同級生を自殺から救えなかったと後悔している益田(生田斗真)。過去を隠し続けなければならない二人が、それぞれの巡礼の終着地で、初めて「友」の存在を知る。場所も時刻も異なりながら、二人の視線は観客の瞳を通し、銀幕上で交差する。目が眩むほどに映画その瞬間に立ち会った観客は、まるで抜け道のない回廊の描かれた騙し絵の中に出口を見つけたときのような感動を覚えてしまう。

あんまり世間の評価は高くないが、個人的に大好きな作品。(渡邊丈洋)

イベントレポート「東京国際サメ映画祭」@新宿ロフトプラスワン

アメリカでは『シャークネード』シリーズや『メガシャーク』シリーズの大人気から、サメをネタにしたいろいろなタイプの映画が製作されています。まあ、基本はアクション、SF、ホラー、バカ映画などのエンタメ系ですが。もはやサメが空を飛ぶのは当たり前、時には砂漠に埋まっていたり、宇宙まで飛んで行ったり、超巨大だったり、ロボットだったり、悪魔に呪われていたり、下半身がタコだったり、頭が5つくらいあったりするサメたちが大活躍しています。

そんなサメ映画のお祭り「東京国際サメ映画祭」が先日新宿ロフトプラスワンで開催されました。場内は200名以上のサメ好きな観客で超満員。さらにテレビ局の取材も入り、日本でもサメ映画ブームが来ていることを実感させられました。新作サメ映画の紹介から、日本唯一(?)のサメ映画『ジョーズイン・ジャパン』の関係者を招いてのトーク、更には家の中にサメが潜んでいて人を襲うという訳の分からない新作映画『HOUSE SHARK (ハウス・シャーク)』の紹介もありました。

後半ではサメ映画クイズが開催され、全員参加の筆記試験を経て、上位5名の「サメ映画五賢人」による早押しクイズ大会が行われ大変盛り上がりしました。今年9月には制作費150億円、ジェイソン・ステイサム主演のサメ映画『MEG ザ・モンスター』も公開されます。まさに大盛り上がり中のサメ映画。みなさんもご覧になってはいかがでしょうか。(吉野 治)



『プラハからの手紙』 (アンガ・ドウィマス・サソコ監督 / 2016 年)

女性主人公ララサティは、病気で死の床に就く母との約束で、母の遺産を受け継ぐため、母が大切に所有していた木箱をもってプラハに住むインドネシア人男性ジャヤに会いに行く。ララサティはプラハでジャヤに会うことは出来たが、ジャヤはその木箱の受け取りを固辞し、ララサティに冷たくした。スカルノからスハルトに政権が交代する中で、プラハに留学していたジャヤの歴史と・運命が少しずつ語られ、母とジャヤの関係についてもララサティは知ってゆく。

「もしかしたら私たちは親子だったかもしれないね。」ジャヤはララサティにつぶやいた。

プラハの街で仲間とジャズを演奏するジャヤ。ジャヤを学生時代から慕い続け、ジャヤを温かく支えるチェコ人の喫茶店女性マスター。プラハの街を静かに時は流れてゆく。プラハを舞台にした映画は他にも、かつてナチスと戦ったプラハの人々を描いた映画『抵抗のプラハ』(1971年)がある。人は歴史の中で生きている。この映画を通じて、歴史が人の一生に大きく影を落とすことを再認識した。現実動く時が織りなす光と影が少しだけ観えた。(佐々木健雄)

『パンク侍、斬られて候』 (石井岳龍監督 / 2018 年)

江戸時代、一人の侍がついたその場しのぎのハッターをきっかけとして、藩内の派閥争いが新興宗教の暴動をよび、さらには人間 VS 猿 VS エスパーという誰も見たことのない謎の戦いをよぶ超荒唐無稽ムービー。クドカン節炸裂の痛快な脚本と豪華キャストの怪演によって、気付いたときにはものすごい勢いでめくるめくカオスに引き込まれている。

パンクの何たるかなどということはミュージシャンでもなんでもない私に語ることはできないが、人間の欲望と衝動が渦巻く混沌の世界を、理屈も脈略もなくぶった斬っていく、この不条理さこそが“パンク”なのかもしれないと思ったりした。そしてそんなパンク侍が最後に何によって斬られていくのか、そこに待ち受けるシニカルな結末もまたクールである。「腹ふり党」教祖・浅野忠信のふざけすぎているアドリブ演技と、やたら良い声で人語を操る猿・ゼウス (CV 永瀬正敏) はとにかく必見。(野瀬寛子)

上映会 レポート

6/5 (土) ベルブホール

ニーゼと光のアトリエ

『ニーゼと光のアトリエ』は、地元・多摩の人たちに観に来てもらいたいんです」と、6月の企画者から話を受けたのは上映会のひと月前のこと。すぐさま中心で動くチームのメンバーを集め、どうやったらこの魅力ある映画をさらに豊かなものとして市民のみなさんにお伝えできるかを話し合いました。

『ニーゼと光のアトリエ』が描いたのは、単なる不遇な精神病患者や人間愛に溢れた医師ではありません。病気や障害によって人間性を外に発する方法がわからなくなった人たちに寄り添い、その伝え方を手探りで見つけていくための方法としてニーゼはアートを選び、その人らしさを取り戻す場所としてアトリエを作ったのです。

ゲストの佐久間寛厚さん (アトリエ・エレマン・プレゼン東京代表)、藤木晃宏さん (株式会社 芸術造形研究所 取締役) によるトークでも、アートは人が思いを伝え、人を理解するためにものだという話をうかがうことができました。人は孤独なもの。だからこそ人を独りにしないことが大事。障害者も健常者も関係なく、そのための方法をみんなで考えていけたら……。

この上映会が作品の意味だけでなくアートの意味、そして人生の意味に思いをめぐらせるきっかけになっていたら幸いです。(永井 理)



ゲストの佐久間寛厚氏 (中央) と藤木晃宏氏 (右)

次回特別上映会 8/25(土) ベルブホール

映画 **KUBO/クボ 二本の弦の秘密** 上映と

 **こま撮りイベント**

次回特別上映会は8月25日(土)に「映画『KUBO/クボ 二本の弦の秘密』の上映とこま撮りイベント(トーク:合田経郎/実演:峰岸裕和)」を行います。お楽しみに!

* こま撮りイベント:

合田経郎監督作品上映 + こま撮り実演とトーク

* 『KUBO/クボ 二本の弦の秘密』は吹替版を上映いたします



『KUBO/クボ 二本の弦の秘密』

第89回アカデミー賞®2部門(長編アニメーション、視覚効果)ノミネート作品

監督:トラヴィス・ナイト

2016年/アメリカ/カラー/シネスコ/103分

© 2016 TWO STRINGS, LLC. All Rights Reserved.

お知らせ コーナー

第28回映画祭TAMA CINEMA FORUM たまシネマ隊募集!

TAMA映画フォーラム実行委員会は、2018年11月17日(土)～11月25日(日)に開催予定の第28回映画祭TAMA CINEMA FORUMをサポートするたまシネマ隊を募集します!

説明会は9月17日(祝・月)、9月30日(日)を予定しています。

応募方法などの詳細は後日ホームページで発表いたします。

支援会員制度のお願い

当映画祭を一緒に支えて頂ける支援会員を募集しています。映画を「観る人、観せる人、創る人」の交流の場づくりを通じた、地域と日本映画界の活性化に向けて、資金面でサポート頂けませんか。ご支援頂いた方には特典をご用意していますので、ぜひご協力をお願いいたします。

[支援金寄付 個人会員] 一口1000円から

郵便振替番号 00160 - 5 - 541123

加入者名 TAMA映画フォーラム実行委員会

(ご不明な点はお問い合わせください)

特典①: 映画祭チラシ送付

特典②: 映画祭パンフレット贈呈

特典③: 特別上映会割引(当日チケットを、支援会員特別価格に。上映会は2～8月の間に4～5回開催予定)

その他の特典もご用意する予定です。

※支援会員のお申込みがホームページからもできるようになりました! ぜひご活用ください。

TAMA映画フォーラム実行委員会ホームページ www.tamaeiga.org

 @tamaeiga (最新情報をフォロー)  www.facebook.com/tamaeiga (facebookページに「いいね!」で参加)